

丸木舟を訪ねて (1)

—出土丸木舟観察時の要点と縄文時代丸木舟について—

松井哲洋

はじめに

日本の各地で数百艘の丸木舟が発掘されている。

その中でも千葉県からの出土事例は100艘以上と多い。千葉県の丸木舟としては、最古級といわれる縄文期の南房総市加茂遺跡、古墳時代の舟葬事例と推測される館山市大寺山洞穴、最大級の多古町栗山川流域から出土したものが有名である。

日本は島国であり、船の果たした役割は少なくないものと思われるが、丸木舟など原始・古代の船の解析はあまり進んでいない。

網谷克彦「縄文時代丸木舟研究のために」では、「丸木舟の製作方法、時間軸上で形がどう変わっていったのかという編年、海や川湖沼という水域環境に伴っての変化、地域差などの研究などは、清水潤三氏の研究からほとんど進展していない。その原因として、丸木舟は水辺に限定される道具であり、どこからでも出てくるものではない。木質物が保存されるためには低湿地の遺跡に限定される。保存状態が良くない事例が多く形すらわからないこともある。」と丸木舟の研究が進まない現状とその背景が語られている。

筆者は、出土した丸木舟を「船としての視点」から解析し、より詳細な情報を得たいと考えていた。しかし、網谷氏が指摘したような状況であり、更に保管方法の制約などもあり、基礎的資料の作成すら難しい。

そこで、できるだけ多くの丸木舟を観察

することで、解析するためのヒントを探しだすことができないかと考え、各地の丸木舟を訪ねる旅に出た。

本稿の「丸木舟を訪ねて(1)」では、

1 出土丸木舟の分類方法や解析方法の概要

2 縄文時代丸木舟の地域間比較

3 丸木舟と櫂の分布比較などを述べ、次回の「丸木舟を訪ねて(2)」において、

4 弥生・古墳時代の丸木舟

5 準構造船の造船技術

についての検討を行いたい。

尚、本稿では、まとめ、引用、参考文献については次回との重複を避けるため割愛し、次回「丸木舟を訪ねて(2)」でまとめて記載する。

1 丸木舟の分類、観察方法の概要

1-1 呼称

丸木舟という呼称について、狭義には単材刳舟を意味するが、広義には

a 一本の丸太から刳り貫かれたもの

b 刳り抜き部材同士を前後に継ぎ、長さを増したもの

c 刳り抜き部材を左右に継いだり、船底部に板を矧ぎあわせて幅を広くしたり、舷側に板を継ぎたして深さを増したものが含まれる。

安達裕之著『日本の船』では、aを単材刳船、bを複材刳船、cを準構造船と呼び識別している。

また、丸木舟は

丸木舟(船)、独木舟(船)、刳り舟(船)

と呼ばれることがある。

民俗事例として

出口晶子著『丸木舟』にはマルキブネ・マルタブネ・クリブネ、由良勇著『北海道の丸木舟』にはアイヌ語でチプ・イタオマチプ、川崎晃稔著『日本丸木舟の研究』には奄美でスブネ、石塚尊俊著『鑪と刳舟』には日本海側にモロタ・トモド・ソリコ・トモブトと呼ばれる丸木舟が存在したことが報告されている。その他に秋田のエグリ舟など、丸木舟の呼称が各地に数多く存在していたことが確認されている。

1-2 形状分類

①清水潤三は「日本古代の船」などで平面形状から

- a 割竹形
- b 鱧節形
- c 折衷形
- d 箱形

の4形状に分類し、さらに木取り方法から多様な分類方法があることを述べている(図1)。

②出口晶子著『丸木舟』では、単材刳船から構造船への発達段階を横断面から、

- a 単材刳舟：O
- b タナ（舷側板）発達：A、B、C
- c シキ（船底板）発達：X、Y、Z
- d タナとシキの発達の組み合わせ：AX～CZ

の16形状に分類されている

(図2)。

尚、同書中の明治27年(1894)刊行『水産事項特別調査』では、在来型漁船を「刳舟形」・「伝馬形」・「一枚棚」に分類し、更に「刳舟形」を「丸木舟」、「舳チョウ」・「刳抜舟」・「その他」の4種類に分類されている。

③由良勇著『北海道の丸木舟』では、北海道の丸木舟がほとんど「鱧節形」に属し、「割竹形」が厚岸に1艘あるだけで、「折衷形」は皆無であると述べられ、

舳の形状から

- a 角形
- b 円形

c 尖形

d 舳の切り込みにV形凸部をのこすものの4種類に分類し、更に、胴部断面の形状から

- a 半円形
- b 角形
- c 円形

に分類されている。

1-3 細部特徴

出土丸木舟には、切削痕・焦痕・穿孔痕・帯状刳り残し・船首尾の細加工など、細部の特徴が認められる場合があり、観察時の手がかりとなる。

①切削痕

製作時における刃物の跡が明瞭なものがあり、使用された刃物の形状が推定できる可能性を秘めている。たとえば、千葉県多古町栗山川流域から出土した丸木舟の内面には、明瞭な刃物痕が残されている。展示ケースの外から観察したにすぎないが、およそ9cm幅の丸刃を使用していたと推測される。

切削痕の解析には、近年、各地で復元製作されている石斧や鉄製工具などによる切削実験が参考になるものと思われる。

②焦痕

焦痕は、縄文時代から近世に亘る、いくつかの丸木舟に認められる。また北海道や千葉県、滋賀県、福井県などから出土した丸木舟にも焦痕が認められるものがある。このことから、時代や地域を問わず、焦がす技術を活用していたことが推測される。

この焦痕の意味することは、石斧での切削を容易にする目的で焼いたと考えられていたが、最近は何の理由も推測されるようになってきた。尚、この焦痕は内面に多く、外面についている事例は比較的少ない。

焦痕は、製作時の切削を容易にするため、切削後の拡幅のため、防腐のため、平滑にするために焼いてついたものと推測されているが、明確な目的はまだ良くわかっていない。

③穿孔痕

穿孔痕は単材刳船にほとんど認められず、

複材刳船や準構造船、構造船に認められる加工痕である。

しかし、アイヌの丸木舟などでは、単材刳船と推測されるものにも痕跡が認められる事例があるので、個々の事例について注意深く観察することが求められる。この加工痕には貫通したものと半貫通したもの、丸みを帯びたものと四角いもの、縦横が同幅のものと同横長のものなど、様々な形状がある。この穿孔痕の観察によって、使用された穿孔具や接合技術などが推測されるものと期待する。

筆者は、船釘の研究で穿孔具や穿孔痕について調査してきた。それは、穿孔痕の観察によって、出土遺物の中から船関連の遺物と他の遺物とを識別する手がかりや、船の発達史を探る手がかりが得られるものと期待しているからである。

日本の船は丸木舟から準構造船、構造船へと発達してきたと推測されている。しかし、このような発達をするためには板材の製作、部材同士の接合、接合部の水密化など、基本的な技術が不可欠であると考えられる。

小さな出土遺物の場合、船か建築部材かを識別するのに、接合痕が唯一の手がかりとなる可能性が高い。しかし、各時代、各地域において、どのような接合技術があったのかは、まだ十分な知見が得られていない。

④帯状刳り残し

各地から出土した丸木舟の船底部に浅い帯状の刳り残しが認められるものがある。その理由として、横方向の強度向上、操船時の足がかり、座席、船内の仕切り、割れ防止などが推測されている。

⑤船首尾上部の細部形状

船首尾に突出部を造り、孔やツノ、くびれなどの加工が施されたものがある。これらは、装飾的な目的と実用的な目的で加工されたものと推測されているが、その目的は多くが不明である。

⑥文様

側面などに、文様が掘り込まれたものがある。装飾的のため、所有者を明確にする

ためなどの理由が推測されているが、目的や意味の多くが不明である。

1-4 大きさや厚さ

①船の大きさ

丸木舟の場合、最大の長さ、最大の幅、最大の深さで表される場合が多い。しかし、一般の船舶の場合、トン数・敷（船底）の長さ・登録上の長さなどで表される場合が多く、丸木舟のように全長で表されることは少ない。そのため、丸木舟の大きさを一般の船舶と比較する場合には、注意を要する。

近年、出土丸木舟の長さや幅の比や深さなどをグラフ化し、その傾向を解析した研究者が現れてきている。

丸木舟の大きさについて、最大部の長さのみが表示されることがほとんどであり、船として、最も重要な水面下の情報が明記されることは少ない。

作図も上部から見た平面図と側面図がほとんどであり、喫水線部分や水中部分など、船として重要な部分の形状は不明瞭な場合が多かった。しかし、最近の報告書には、数箇所の横断面図が記載されているものも増え、詳細な解析が可能になりつつあるようだ。

一般的に、出土丸木舟の大きさは、長さ10m以下、幅1.2m以下のものがほとんどであり、単材刳船に限れば、長さ6m以下、幅70cm以下のものが多いようである。

現在のレジャー用カヌーなども長さ6m以下、幅70cm以下のものが多い。また、現在の無動力小型和船の長さもほぼ同様なものが多いが、幅は幾分広くなる傾向がある。出土した単材刳船の長さや幅の比は10ぐらいのものが多く、小型和船の長さや幅の比は5ぐらいのものが多い。

②厚さ

各部の厚さは、作図された図面や記載された数値から確認できる。しかし、出土丸木舟は経年による変化が激しく、計測する部分によって大きな差異が生じる場合が少なくない。また、腐食や膨潤した外形は本

来の板厚と異なる場合もある。従って、計測者がどの部分を、どのように計測したかによって数値が異なる場合があり、注意を要する必要がある。板厚は、使用水域が岩礁地帯か砂泥地帯か、樹種、船の大きさ、船の使用目的、製作者の技能などによって異なることが推測される。また、船底部・舷側部・船底から舷側にかけての屈曲部・船胴部・船首尾などでそれぞれ異なっている場合が多い。

現在の長さ10m以下の和船は、板厚が7分～2寸(2cm～6cm)のものがほとんどである。また、削り抜き部材を使用した船の最も厚い部分でも3寸(9cm)以下のものが多い。出土した削り船の板厚も、ほぼこの範囲内に収まるようである(船首尾を除き)。

1-5 木材の用法

① 樹種

時代や地域によって、特有の樹種が使用されていることが指摘されている。

縄文時代の丸木舟は、樹種が日本海側で杉、琵琶湖周辺で杉・カラマツ、関東でカヤ・クリ・ムクノキなどの事例がある。古墳時代の丸木舟は大阪で出土したものが楠、千葉県館山市の洞穴から出土したものが杉で、近世の丸木舟は北海道で出土した桂やタモなどであり、地域や時代によってある程度樹種を選択する傾向が認められる。

縄文時代の日本海側では、杉の木の分布が広く認められている。そのためか、日本海側における縄文時代の出土丸木舟には杉の事例が多い。

現在の和船の船板に最も多く使用されている樹種は杉であるが、他に檜・榎・カヤなどの事例があり、部分的に、松・樺・樫などが使用される。

近世以降、同一地において、造船部材の樹種変更が認められる場合がある。その理由として、大木の枯渇や船型の変更(削り船的なものから板船へ)などが推測されている。

② 辺材、心材

杉などの丸太の辺材部はシラタと呼ばれ、

柔らかく比較的腐りやすい。丸太の心材部はアカミと呼ばれ、比較的硬く、耐腐食性が高い。和船の建造時には、経済的に許される範囲でシラタを切除し、アカミで船を製作するよう、船大工は努力しているのだと聞く。

縄文時代にはすでに木材に関する豊富な知見があり、丸木舟の製作時にも、現在の船大工のような感覚が生かされていたものと思われる。得られる丸太の大きさが製作可能な丸木舟の最大値となる単材削船の場合には、シラタ部を切除する際、現代以上に注意深い配慮がなされたものと思われる。

近年、丸木舟を復元する場合、石斧での加工のしやすさなどから、シラタ部を切除し、アカミ部のみを使って製作することがあるようだ。しかし、出土丸木舟の表面の観察などから、シラタ部の切除には疑問を持つ研究者もいる。

単材削船の欠点は横幅が狭いため、横方向の安定性が得にくいことである。シラタ部の削除は、丸太の幅を更に細くし、船の横方向の安定性を減少させることになる。

③ 立ち木の元末、南北、山谷

船首尾のどちらを太くするか細くするか、または同一の太さにするかは、樹種、得られた丸太の形状、操船方法、用途、航行水域などで異なるものと思われる。

また、どちらが船首なのかということも、完形で出土することが少ない丸木舟では識別が困難である。

立ち木の状態で、南側と北側、風上側と風下側、斜面の山側と谷側では、木の生長速度が異なり、比重が僅かに異なる場合がある。このような点に注意を払って造船している事例もあるようだ。

船首尾の太さは、船の抵抗や前後方向の傾きに影響し、微妙な比重差は横方向の安定性を左右する要素になるものと推測される。

④ 船首尾の年輪

船首尾に残る年輪の観察によって、木取り方法など製作技術に関する様々な情報を得ることができる。

⑤節

出土丸木舟は、比較的節の少ないものが多いが、中には節の多いものがある。名古屋市平手町出土の舟形木棺は、樹種が檜である。当時の丸木舟にはあまり使用されない樹種であるため、丸木舟を転用したのではなく、はじめから木棺として作られたものと推測されている。この木棺の特徴は、節が非常に多いことである。この節の存在によって、製作時の厚さを読み取ることができる。また、枝の多い部分が使用されていたこともわかる。直径1 mほどの大木で、しかも枝が多い部分であれば、かなり木の上のほうの部分である。節が少ないほうがきれいで、切削も容易であるのに、どうしてわざわざ節の多い部分を選択したのだろうか。

この木棺が、もし丸木舟だとすると、長さは10 mほどの長い木材を必要とする。しかも、その先端部であれば、枝の多い部分も使用せざるをえなかったと推測できる。このことから、はじめから木棺として製作されたのではなく、丸木舟の転用の可能性も考えられる。

1-6 その他の観察点

丸木舟を観察して解析する際、形状的な分類以外に多様な方法が検討されている。

①川崎晃稔著『日本丸木舟の研究』では、形状や技術の変遷ばかりでなく、製作の習俗、製作の儀礼、操船の習俗なども重要であり、総合的な調査が必要であると指摘されている。

②滋賀県文化財保存協会『丸木舟の時代 びわ湖と古代人』では、

a 丸木舟はどうしてつくられたのか？

(丸木舟が出現する背景、植生、木工技術についての検討)

b 丸木舟はどう使われたのか？

(運ぶ道具である丸木舟の機能面についての検討)

c 丸木舟の役割はなにか？

(社会や生産活動などのライフスタイルにおける丸木舟の果たした役割についての検討)

という3つのテーマについて検討されている。

③伴出物

伴出物には様々なものがあり、丸木舟を解析するためには不可欠である。

伴出物は、各報告書において詳細に記述されており、解析も進んでいる。

丸木舟と関連の深いものとして、

a 船具：舷側板、櫂、棹、錘石

b 漁具：網、綱、竿、ヤス、釜

などの事例がある。

更に、葦などの水辺に生育する植物が船体と石の間に挟まって出土する事例もあり、舟の使用方法に関する情報が得られる可能性を秘めている。

また、土器は丸木舟の時代を推定する判断材料となり、最も重要なものとして活用されることが多い。

④出土地点の風景

丸木舟が使用されていた時代の環境は、丸木舟の形状などに強く影響を及ぼしていたものと推測される。

a 水域（川、湖沼、海）

b 微地形、微気候

c 卓越した植生

など、当時の風景を確かめることも、丸木舟を解析するために役立つものと思われる。

⑤舟（船）が出土するための条件

不思議なことに、日本の舟（船）が出土した数量としては、縄文時代の丸木舟が最も多く、古墳時代以降のものは少ない。

舟（船）が発見される条件として

a 舟（船）が使用されていた。

b 腐朽する前に水中や土中に埋没して保存された

という2つの要素が不可欠である。また c 出土遺物が舟（船）であることを認識できる

という要素も必要となる。

a は使用されていた時代の環境、b はそれ以後の環境の変化、c は解析能力に関係しているものと思われる。b については、2011年3月11日に発生した巨大津波による被災地を訪ねた際、津波の影響も考慮すべきことを新たに考えさせられた。

⑥用途

出土丸木舟は、主に漁撈や水上交通に使用されていたと推定されている。しかし、舟葬に使用したと推定されている事例として、名古屋市平手町で出土した舟形木棺、館山市大寺山洞窟から出土した丸木舟、奈良県巢山古墳から出土した喪船部材などがある。だが、舟葬という概念は、まだ意見が分かれているようだ。

1-7 今後の課題

ほとんどの単材刳船に関して、縄文時代から現代に至るまで、大きな形状差は認められない。そのため、上記のようなわずかな差異を読み取ることが求められる。

①単材刳船の形状において、最も大きな差異が現われるのは、船首尾の形状と胴部断面の形状である。したがって、船首尾部の立体的な形状を表すためには、細かな断面の形状を作図することが必要となる。水平、横、縦断面図を10cmぐらいの間隔で作成することによって、詳細な形状の解析が可能になるものと思われる。

②出土直後と保存処理後とは、大きな差異が生じる可能性があり、出土直後の詳細な写真や作図などの記録が不可欠となる。

解析方法が十分に確立されておらず、また紙面の都合もあり、発掘時の重要な情報が必要しも報告書に記録されているとは限らない。そのため、発掘時の感想なども含め、できるだけ多くの「生の記録」を残し、公開して多方面から活発な検討が行われることを期待したい。

2 縄文時代丸木舟の比較事例

それぞれの地域における丸木舟について、詳細な研究がなされているが、縄文時代から現代にかけて長い期間での時代間や、北海道から沖縄に至る広い範囲での地域間の比較研究は少ないようだ。

そこで、まず縄文時代の丸木舟に限定し、地域間と時期間を長さとの比で比較した。

表1は『丸木舟の時代一びわ湖と古代人一』滋賀県文化財保存協会・2007年に

一部加筆した縄文時代丸木舟の一覧表である。

表1において、出土地点が千葉県を中心とした関東、琵琶湖周辺、北陸から山陰に至る日本海側の3箇所が多いことがわかる。

表2は、保存状態が良くて全長と最大幅がほぼ読み取れる丸木舟を長さとの観点からまとめた表である。

記号は、
地域記号

関東：◎

琵琶湖：△

日本海側：□

時期記号

早期：s

前期：z

中期：t

後期：k

後期～晩期：k b

晩期：bとした。

グラフ1は、縦軸を最大長、横軸を最大幅とし、長さとの比を組み合わせて作成したものである。

表3-1は地域間の、表3-2は時期間の長さとの比の関係をまとめたものである。

表3-1、表3-2から、

a 縄文時代丸木舟の地域間及び時期間の差異は少ない

b 長さ5～6m、幅50～60cmのものが多い

c 長さとの比は約1.0

などが読み取れる。

縄文時代の巨木を使用した事例があることから、更に大きな丸木舟の製作も可能であったはずである。しかし、敢えて、長さ5～6m・幅50～60cmの丸木舟を選択し、製作していたということが、これらの比較から推測できる。

その理由については、次回「丸木舟を訪ねて(2)」で検討したい。

3 出土丸木舟の分布と出土櫂の分布比較

丸木舟と最も関連の深い出土遺物は、櫂や棹などの推進具である。これらの推進具

については、江野道和（伊都国歴史博物館）や吉田知史の研究がある。

図3は、表1 縄文時代丸木舟の一覧を使って作図したものである。

図4は、江野道和「原始・古代船の推進具を考える（中）—縄文時代から古墳時代を中心とした推進具集成一」『伊都国歴史博物館紀要4号』2009年より、縄文時代の櫂を抜粋して作成した県別の分布図である。

縄文時代の櫂が多く出土する地域は、縄文時代の丸木舟が多く出土する傾向が認められる。

また、縄文時代丸木舟の出土が少ない北の地域にも櫂の出土事例がある。北の地域からの丸木舟が出土することを期待したい。

弥生及び古墳時代の櫂の分布を作成したものが、図5と図6である。図4、図5、

図6から、

縄文時代：滋賀、福井、島根、千葉、鳥取

弥生時代：滋賀、静岡、福岡、大阪、島根、岡山

古墳時代：滋賀、静岡、宮城、兵庫、大阪

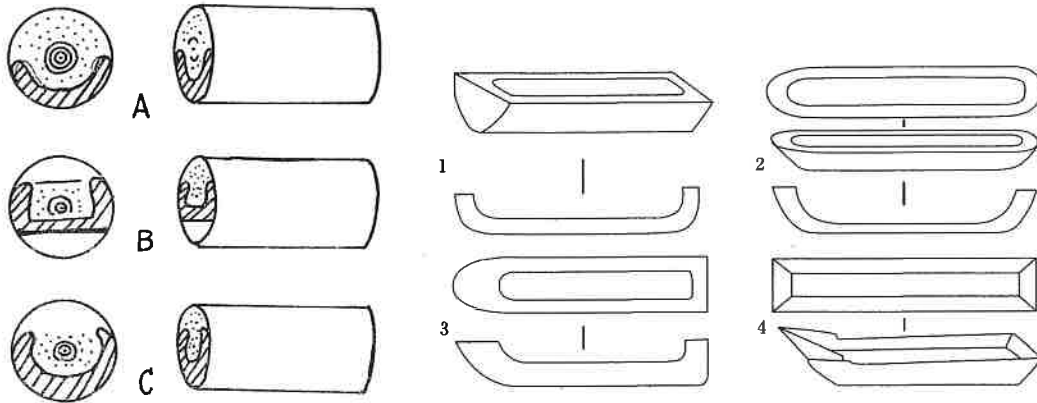
の順に出土事例が多いことがわかる。

縄文時代は日本海側、弥生時代は北九州・瀬戸内・東海、古墳時代は東北の一部から出土した事例が目立つようになる。弥生及び古墳時代には、近江と遠江から出土した事例が最も多い。

時代ごとに異なる櫂の分布には、興味深いものがあるが、次回の「丸木舟を訪ねて（2）」での検討としたい。

（まつい・てつひろ 当館展示協力員）

図1

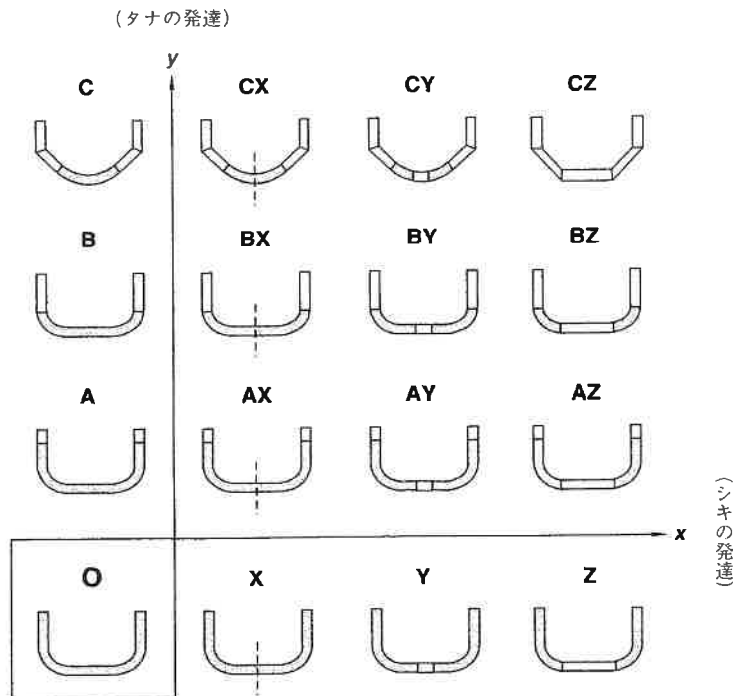


横断面による分類(木取り法模式図)
A半円形 B凹形 C半円特殊形

丸木舟の形態
1割竹形 2継節形 3折衷形 4箱形

清水潤三著「日本古代の船」『船』 大林太良編 社会思想社 1975年 p54、p56

図2



- 剥りぬき材 シキ：船底板 O：単材割舟
- 板材 タナ：舷側板 CZ：構造船
- 剥りぬき材2材による接合

シキとタナの発達からとらえた割舟の横断面分類

出口晶子著『丸木舟』法政大学出版局 2001年 p6 より

表1 縄文時代丸木舟一覧

NO	都道府県	市町村	遺跡名	時期	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	厚(cm)	材	特徴・備考
1	北海道	石狩市	紅葉山49号	中期後半	45	22				軸
2	青森県	野辺地町	向田18(向井)	前期末～中期初頭	35	32			ハリギリ	破片
3	福島県	新地町	双子	後期	243	63			マツ	
4	福島県	新地町	双子	後期	370	30			マツ	
5	栃木県	大平町	西山田	後期	669				ニレ属	製作途中
6	埼玉県	伊奈町	伊奈氏屋敷	後期末～晩期前半	370	60	8		ケヤキ	
7	埼玉県	伊奈町	伊奈氏屋敷	後期末～晩期前半	485	55	20		カヤ	
8	埼玉県	伊奈町	伊奈氏屋敷	後期末～晩期前半					カヤ	
9	埼玉県	川口市	赤山庵屋跡	後期～晩期						
10	埼玉県	川越市	中老袋	後期	549	60	35			軽節型
11	埼玉県	川越市	蓮沼	後期						
12	埼玉県	さいたま市	寿能	中期後半	35	45			トネリコ	破片
13	埼玉県	さいたま市	膝子 1	後期末～晩期初頭	700	50	25		クリ	ほぼ完形
14	埼玉県	さいたま市	膝子 2	後期末～晩期初頭					クリ	
15	埼玉県	さいたま市	膝子 3	後期					クリ	
16	埼玉県	さいたま市	膝子 4	後期					クリ	
17	埼玉県	さいたま市	膝子 5	後期					クリ	
18	埼玉県	さいたま市	膝子 6	後期					クリ	
19	埼玉県	さいたま市	大道東	中期前半	450	80			ムクノキ	完形なら5m以上
20	埼玉県	さいたま市	四本竹							破片
21	埼玉県	草加市	綾瀬川流域	前期	600	30			クリ	C14で5300年前。3横帯
22	千葉県	多古町	中城下泥炭	後期～晩期末	400	70			カヤ	
23	千葉県	多古町	島ノ栗山川流域	中期	745	70	15		ムクノキ	内面全体焦痕。石2個
24	千葉県	多古町	ゴーフケ沼	後期?	513	50	25			軽節型
25	千葉県	多古町	南借当		490	78	39		クリ	
26	千葉県	多古町	南借当						クリ	
27	千葉県	多古町	島	後期	482	50				
28	千葉県	多古町	船越丸山地先	後期	450	70			カヤ	
29	千葉県	多古町	船越丸山地先	後期	530	50				
30	千葉県	八日市場市	矢摺泥炭	後期	317	45	18		クリ	半分欠損
31	千葉県	八日市場市	宮田下泥炭	後期	399	43			クリ	2つ折れ。船首一部欠損
32	千葉県	八日市場市	宮田下	後期	500	45				
33	千葉県	八日市場市	多古田低地	後期～晩期	400					船首のみ
34	千葉県	八日市場市	七軒掘							調査中
35	千葉県	八日市場市	七軒掘							調査中
36	千葉県	八日市場市	旧新田下沼	後期	416	40			カヤ	
37	千葉県	八日市場市	旧新田下沼		345	58	20		カヤ	
38	千葉県	八日市場市	旧新田下沼						カヤ	
39	千葉県	八日市場市	旧新田下沼						カヤ	
40	千葉県	八日市場市	米倉大鏡		417	45	25			完形。軽節型。横帯
41	千葉県	八日市場市	米倉大鏡		600					
42	千葉県	八日市場市	米倉大鏡		347	42	21			軽節型。横帯
43	千葉県	八日市場市	米倉大鏡							
44	千葉県	八日市場市	米倉大鏡							
45	千葉県	八日市場市	米倉長割		421	45	20			軽節型。横帯
46	千葉県	八日市場市	安田	晩期						
47	千葉県	八日市場市	亀田泥炭		55	22	44		カヤ	
48	千葉県	千葉市	落合ノ検見川畑町	後期?	620	43			カヤ	
49	千葉県	千葉市	落合ノ検見川畑町	後期?	580	48	44		カヤ	ほぼ完形。軽節型
50	千葉県	千葉市	落合ノ検見川畑町	後期?	348	58			カヤ	
51	千葉県	横芝町	高谷川B	後期中葉	459	70	33		カヤ(クリ)	軽節型
52	千葉県	横芝町	高谷川G		260	45	22			
53	千葉県	横芝町	古川	後期					カヤ	
54	千葉県	丸山町	加茂	前期(諸磯式期)	480	70	15		ムクノキ	
55	千葉県	八千代市	俣品	晩期?	654	50			カヤ	ほぼ完形。横帯4。焦痕
56	千葉県	松戸市	横須賀	後期	557	45			カヤ	
57	東京都	北区	中里	中期初頭	579	72	42		ムクノキ	ほぼ完形。軽節型
58	東京都	北区	袋低地	後期					トネリコ	破片
59	東京都	北区	袋低地	後期					トネリコ	破片
60	東京都	北区	袋低地	後期					ケヤキ	破片
61	神奈川県	横須賀市	伝福寺裏	前期後半	295	40			イヌガヤ	矢板による切断
62	新潟県	加治川村	青田	晩期末	700	80	13		トチ	
63	静岡県	静岡市	太谷川	晩期	670	60				ほぼ完形
64	愛知県	左織村		晩期						榎材割リ舟
65	岐阜県	谷汲村	末福	後期	259	49	18		クス	ほぼ完形。軽節型軽節型
66	岐阜県	谷汲村	末福	後期	350	43	23			ほぼ完形
67	石川県	七尾市	三室トクサ	前期～中期	530	60～80	20	2～5	モミ	一部欠損。石5。内外焦痕。小穴多数
68	福井県	三方町	島浜	前期	608	63	26		スギ	ほぼ完形
69	福井県	三方町	島浜	後期	347	48			スギ	船首半分欠損。横帯
70	福井県	三方町	ユリ遺跡 1	後前	522	56	10		スギ	完形。横帯
71	福井県	三方町	ユリ遺跡 2	後期	490	48	8		スギ	ほぼ完形
72	福井県	三方町	ユリ遺跡 3	後期	580	30			スギ	舷側欠損
73	福井県	三方町	ユリ遺跡 4	晩期	587	45			スギ	舷側欠損。軽節型
74	福井県	三方町	ユリ遺跡 (5)							一部欠損
75	福井県	三方町	ユリ遺跡 (6)							一部欠損
76	福井県	三方町	ユリ遺跡 (7)							一部欠損
77	福井県	三方町	ユリ遺跡 (8)							一部欠損
78	福井県	三方町	ユリ遺跡 (9)							一部欠損

NO	都道府県	市町村	遺跡名	時期	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	厚(cm)	材	特徴・備考
79	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(二次調査) 1	後期(彦崎KⅡ式期)	790	75	30			横帯。内面焦痕
80	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(二次調査) 2	後期(彦崎KⅡ式期)	835	59	15			横帯。内面焦痕
81	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(二次調査) 3	後期(彦崎KⅡ式期)	560	45	13			船首・舷側欠損
82	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(二次調査) 4	後期(彦崎KⅡ式期)	560	54				横帯
83	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(二次調査) 5	後期(彦崎KⅡ式期)	175					
84	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(一調査)		700					
85	滋賀県	近江八幡市	水基B・C(一調査)		690	56				
86	滋賀県	近江八幡市	長命寺湖底 1	晩期後半	620	60	15		スギ	
87	滋賀県	近江八幡市	長命寺湖底 2	晩期後半	600					横帯
88	滋賀県	近江八幡市	長命寺湖底 3							
89	滋賀県	近江八幡市	長命寺湖底 4							
90	滋賀県	彦根市	松原内湖 1	後期	500	45	7		スギ	ほぼ完形
91	滋賀県	彦根市	松原内湖 2	晩期	490	50	18		スギ	ほぼ完形
92	滋賀県	彦根市	松原内湖 3	後期～晩期	335	36	5		スギ	半分欠損
93	滋賀県	彦根市	松原内湖 4	晩期	987	48	16		モミ	ほぼ完形
94	滋賀県	彦根市	松原内湖 5	後期	161	37	4		ヒノキ	後半部のみ
95	滋賀県	彦根市	松原内湖 6	後期～晩期	187	41	11		アカガシ	前半部のみ
96	滋賀県	彦根市	松原内湖 7	後期～晩期	174	38	11			板状
97	滋賀県	彦根市	松原内湖 8	後期	300	30				破片
98	滋賀県	彦根市	松原内湖 9	後期～晩期						破片
99	滋賀県	彦根市	松原内湖 10	後期～晩期						破片
100	滋賀県	彦根市	松原内湖 11	後期～晩期	548	45				完形
101	滋賀県	米原市	入江内湖 1	中期末～後期初頭	400	50	20		モミ	一部欠損
102	滋賀県	米原市	入江内湖 2	中期末	527	51	21		モミ	完形
103	滋賀県	米原市	入江内湖 3	中期末	359	48	10		スギ	
104	滋賀県	米原市	入江内湖 4	後期前葉	570	50	20		モミ	完形
105	滋賀県	米原市	入江内湖 5	前期中半	547	50	30		ヒノキ	完形
106	滋賀県	湖北町	尾上浜	後期	515	55			モミ属	ほぼ完形
107	滋賀県	大津市	錦織	晩期					カシ	
108	京都府	向日市	森本	後期						
109	京都府	向日市	東土川西	晩期	370					
110	京都府		和東川床	後期	370					
111	京都府	舞鶴市	浦入	前期中葉	900	100			スギ	C14ではBP5250年
112	兵庫県	東浦町	佃	前期中葉						
113	鳥取県	鳥取市	桂見	後期中葉	724	74	35		スギ	完形。雙節型
114	鳥取県	鳥取市	桂見	後期中葉	641	70	10		スギ	ほぼ完形
115	鳥取県	鳥取市	東桂見	後期	105	50				
116	鳥取県	福部村	粟谷	後期	300	90				
117	鳥取県	北条市	島	後期	66	55	20			破片
118	鳥取県	淀江町	井手勝	後期～晩期	124	14				破片
119	鳥取県	松江市	橋繩手(島大橋内)	早期末～前期初頭					スギ	転用
120	鳥取県	出雲市	三田谷 I	後期	540	46	14	5~6	スギ	
121	鳥取県	鹿島市	佐太講武貝塚	晩期	115				マツ	破片
122	鳥取県	益田市	沖手 1	後期末～晩期初頭	930	55	12		3 クスノキ	ほぼ完形。横帯1。石。焦痕
123	鳥取県	益田市	沖手 2	後期末～晩期初頭	313	36			センダン	折衷。内部焦痕
124	長崎県	多良身町	伊木力	早期末～前期初頭	650	76			センダン	船底のみ
125	沖縄県	萱野座町	前原						ハリギリ	

この表1は、『丸木舟の時代—びわ湖と古代人—』滋賀県文化財保護協会 サンライズ出版 2007年3月 p216~218
を一部加筆修正して作成したものであり、新規性はない。
作成にあたり、使用した資料は以下の①、②、③、④である。

- ① 辻尾榮市「日本剝削関係資料集—北海道・太平洋岸 予察報告1—」『郵政考古紀要』通巻第37冊 大阪・郵政考古学会 2000年9月 p1~18
- ② 松田真一「物流をうながした縄文時代の丸木舟」『初期古墳と大和の考古学』学生社 2003 p11~20
- ③ 『丸木舟の時代—びわ湖と古代人—』滋賀県文化財保護協会 サンライズ出版 2007年3月 p216~218
- ④ 『千葉県の歴史』資料編 考古4(県史シリーズ12) 千葉県史料研究財団編 千葉県 平成16年 p374~385

しかし、それぞれの記載内容には、かならずしも一致しない部分がある。また、発掘されたが、報告書が未刊行のものもある。
今後、個々の出土事例を再調査した後、一覧表に修正を加えたい。

表2 縄文時代丸木舟の長さ幅比（完形またはほぼ完形のもの）

表1でのNO	長さ cm	幅 cm	長さ幅比	時期	記号	出土地	記号
10	549	60	9.2	後	k	埼玉川越	◎
13	700	50	14.0	後～晩	kb	さいたま市	◎
23	745	70	10.6	中	t	千葉多古	◎
24	513	50	10.3	後?	k	千葉多古	◎
40	417	45	9.3			千葉八日市場	◎
49	580	48	12.1			千葉市	◎
55	654	50	13.1	後	k	千葉八千代	◎
57	579	72	8.0	中	t	東京北区	◎
63	670	60	11.2	晩	b	静岡市	
66	350	43	8.1	晩	b	岐阜県	
68	608	63	9.7	前	z	福井三方町	△
70	522	56	9.3	後	k	福井三方町	△
71	490	48	10.2	後	k	福井三方町	△
113	724	74	9.8	後	k	鳥取市	△
114	641	70	9.2	後	k	鳥取市	△
122	530	55	9.6	後～晩	kb	島根益田	△
79	790	75	10.5	後	k	滋賀近江八幡	□
90	500	45	11.1	後	k	滋賀彦根	□
91	490	50	9.8	晩	b	滋賀彦根	□
93	587	48	12.2	晩	b	滋賀彦根	□
100	548	45	12.2	後～晩	kb	滋賀彦根	□
102	527	51	10.3	中	t	滋賀米原	□
104	570	50	11.4	後	k	滋賀	□
105	547	50	10.9	前	z	滋賀彦根	□
106	515	55	9.4	後	k	滋賀湖北	□
AV	573.84	55.3	10.5				

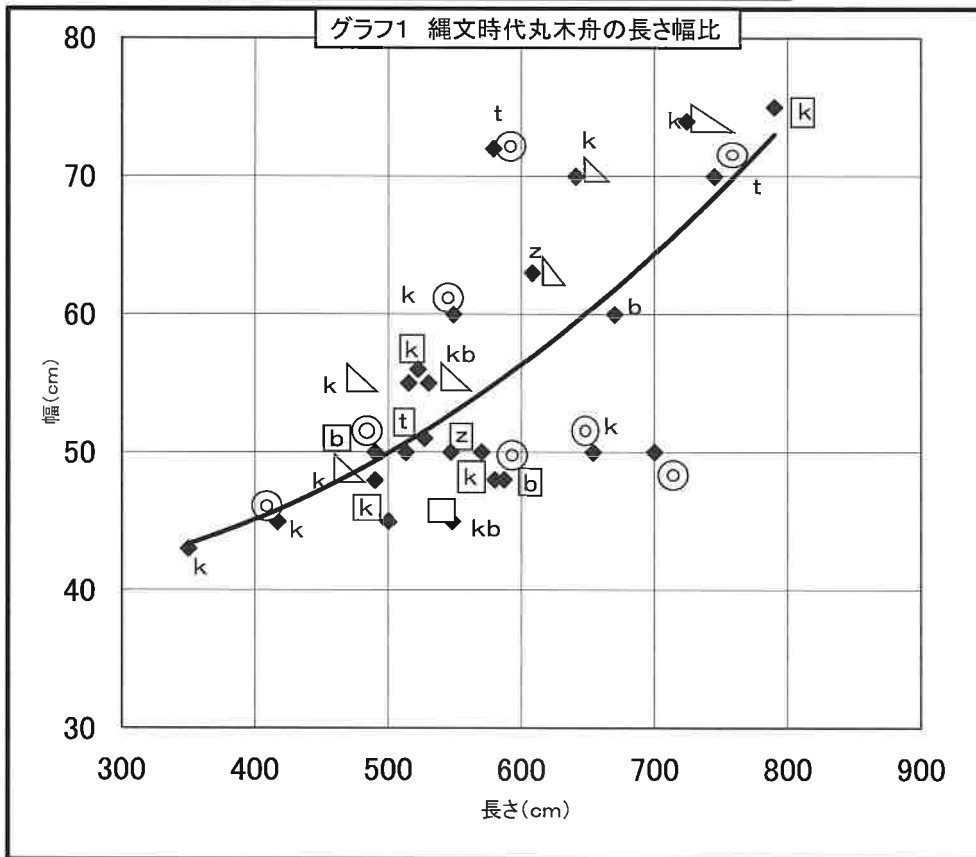


表3-1 縄文時代丸木舟の地域間差比較(長さ幅比)								表3-2 縄文時代丸木舟の時期間比較(長さ幅比)				
地域	n	L	B	L/B	L2σ	B2σ	L/B2σ	時期	n	L	B	L/B
関東	8	592	56	10.8	211	20	4.1	前期	2	578	57	10.1
日本海	6	585	61	9.6	175	20	0.7	中期	3	617	64	9.6
琵琶湖	9	560	52	10.8	182	18	1.9	後期	11	588	58	10.1
全国	23	578	56	10.5	184	20	2.8	晩期	5	524	50	10.5

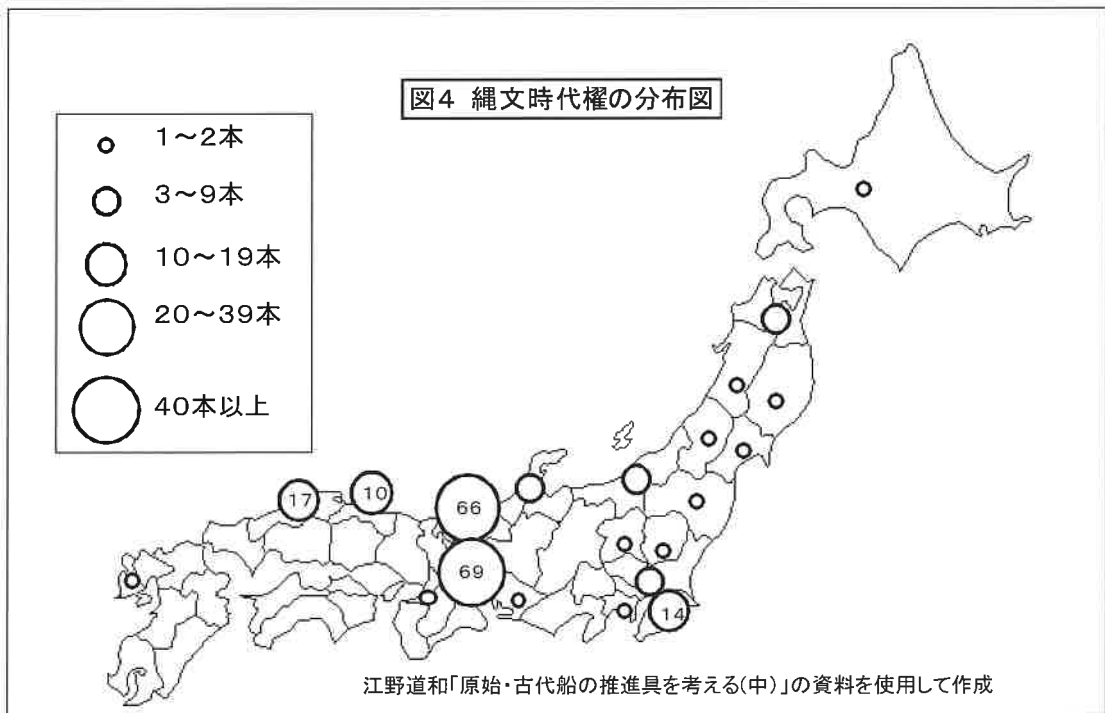
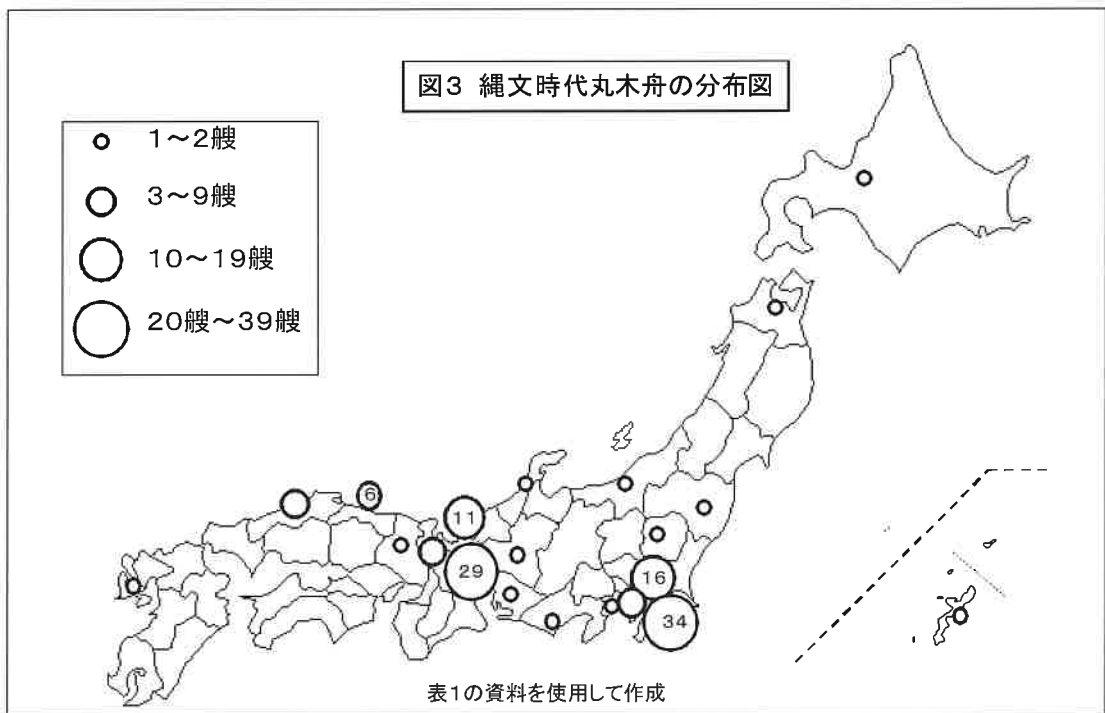
n: 資料数 L: 長さの平均値 (cm) B: 幅の平均値 (cm)
L/B: 長さ幅比 σ: 標準偏差

都道府県別の縄文時代丸木舟出土数(125)

北海道1、青森1、福島2、栃木1、埼玉16、千葉35、東京4、神奈川1、新潟1、静岡1、愛知1、岐阜2、石川1、福井11、滋賀29、京都4、兵庫1、鳥取6、島根5、長崎1、沖縄1

都道府県別の縄文時代櫂出土数(209)

北海道2、青森4、岩手1、宮城2、秋田1、山形1、福島1、群馬2、埼玉3、千葉14、神奈川1、新潟7、石川3、福井66、静岡3、滋賀69、大阪1、鳥取10、島根17、佐賀1



都道府県の別弥生時代櫂出土数(223)

北海道1、宮城2、神奈川2、新潟1、富山2、石川7、福井4、静岡48、愛知3、三重1、滋賀71
 京都5、大阪16、兵庫3、奈良2、和歌山3、鳥取7、島根11、岡山11、香川3、福岡18
 長崎1、大分1

都道府県別の古墳時代櫂出土数(61)

宮城4、群馬1、千葉2、石川2、福井2、静岡16、三重1、滋賀19、京都1、大阪3、兵庫4
 鳥取1、島根2、香川1、福岡1、熊本1

